

華城に天主あり!?

水原華城の踏査から



城壁上から東を臨んだときの
水原第一教会。韓国の人たちに日本の近世城郭における天守発生の意味を説明する場合、ここに連れて来て説明するのがいいかもしれない。

踏査は交流会の前日とその翌日の2日間にわたって行われました。第2日目は水原市庁都市計画課の趙鎬運(チェ・ホウ)氏に案内をしていただき、八達山上の観光案内所を起点に華虹門(ワリヤムン)までの南半分をまわりました。

さて、水原市は人口が約100万の大きな都市です。京畿道庁、韓国空軍基地などがあります。もともと三星(サムソン)や鮮京(SK)といった財閥の工業団地が都市化の要因で、いまではソウルまで国電で1時間という立地が、建設中のもも含め数多くの高層アパート群の森を造りあげているようです。

華城のあるところは水原の旧市街に相当します。とくに八達門周辺は賑やかな場所で、水原では地価が最も高い場所とのことです。しかし、高層アパート群は郊外へと展開しているため、旧市街の求心力は弱まり、高速道ICのある東水原などが発展してきています。日本でも問題になっているスプロール現象と同じでしょう。

さて、水原市庁では世界文化遺産に登録された華城の整備を積極的に行っています。日帝時代でも建物は多くが傷みながらも残っていたようですが、韓国動乱の時にほとんどが破壊されてしまいました。休戦後も住居を失った人々がとくに城壁の際などに住むようになり、積み石などを建築部材として持ち去りました。現在の整備は、そうした人たちの住居を移転させ、崩壊した城郭施設の復元を進めているとのことです。例えば、蒼龍門(チャョンムン)前広場の造成には20億ウォンもかかったといえます。華城では姫路城のように入城料を徴収しているわけではないので、整備や補修にかかる費用の捻出は簡単ではなく、議会ではその是非がいつも議論的になるとのことです。それでも市長をはじめ趙氏などの担当職員は華城に誇りをもって仕事をしています。ある日市長がボランティアガイドに「(A4サイズほどの)レンガが1枚、4万ウォンもするんだよ」と嘆いていたそうですから、苦心されているようです。

ところで、水原市庁における華城の扱いはどうなっているのでしょうか。前号でも書いたように、今回の交流は公式的な視察というものではないので訂正すべき点が出てくると思いますが、ご教示いただいた範囲で記しておきます。

華城にも管理事務所があり、日常的な維持・管理だけでなく、広報活動や復元に関わる技術的な監理や史料の調査など、華城に関係することを全般的に行っています。市庁には学芸研究士(日本でいう学芸員)が一人で、華城も含め、水原市の歴史や文化財など全般的なことを担当しています。埋蔵文化財担当者はいません。韓国では埋蔵文化財調査は学術調査が建前なので、大学や文化財団などが実施するのが一般的だからだそうです。



右写真：南水門近くの店先に干してあった唐辛子。日本の唐辛子とは比べ物にならないほど鮮やかな赤。キムチの赤色には“魔除け”の意味があるという説が想起された。

華城の場合、将来を見据えた整備等の事業を中心になって行っているのは都市計画課です。姫路城とは異なり、華城はほぼ全域が今の市街と重なるためです。日本の場合、文化財担当と整備担当事業部局で意見が対立し、結果的に予算をもって事業部局サイドに押し込まれる例をよく耳にします。水原の場合、今のところそういうことはないとのこと。というのも、市長のリーダーシップが発揮されているからのようです。

上の左写真は水原川です。この川にコンクリートの蓋をして都市計画道路(片側3車線ほど)にする予定で、すでに支柱ができています(写真左端のブルーシート。撮影した場所まですでに道路ができています)。しかし、当時の市長がその計画を撤回したことで、工事は中止になりました。現市長になって再度建設の議題が湧きあがったときもそれを却下したため、城内では川が無くならず済みました。自然保護団体の圧力があつたとの憶測もあるようですが、結果的には市長の英断として評価されており、彼は株を上げました。その後、右端に写る道を拡張、路上店舗を整理した際、...のところから南水門(ナムスモン)の遺構が出土したこともあって(いまでも川中に根石が顔を出している)、城壁近くでは広告や出店禁止区域としています。

水原でもこうして景観を守るためのきまりを設け、世界遺産との調和をはかろうとしています。必ずしも市民から支持されているわけではないようです。八達門周辺では看板や建物の高さ規制を強めたところ、商業施設所有者等から地価が下落したと当局を非難したこともあったそうです。しかし地価下落は、都市のスプロール化が急速に進んでいることとも無関係でないことは自明です。何より、猥雑な昔ながらの市場を除去してテナントビルを競うように建てていった商業手法が災いして集客力を落としていることが要因のように思われました。世界遺産を市街中心に抱える都市の現代的課題については、姫路と水原の間で活発な意見交換ができそうです(都市計画課長金沖泳氏は、2001年姫路市で開催された第10回世界地方都市十字路会議において姫路市長や市民のまえで問題提起をされたらしい)。

景観条例や建物の高さ規制などは、歴史的景観を保持するためには欠かせないきまりです。しかし一方で自由な経済活動を規制してしまいますから、そうしたきまりは最低限必要な範囲だけに及びます。そのため、規制から外れた場所では、世界文化遺産と無関係な施設も造ることができます。前述の蒼龍門の整備では、城内から門の楼閣を撮影すると高層アパートが写り込むため、見えないように赤松を植えています。アパート自体は決して華城に近接しているわけではなくても、高層なために蒼龍門のまるで「借景」のようになってしまっているのです。

華城を踏査してみてとくに気になったのは、前頁写真の教会です。キリスト教信者が多い韓国では、地方に行っても教会をよく見かけます。大都市となると尚更で、規模が大きいものもあちこちに建っています。華城の城内にも教会がありますが、写真の教会にいたっては「バカでかい」という印象を受けます。それが華城を見下すかのように巨大な姿を見せつけています。地形的に最も低い城壁の向い側丘陵上にあるので、一層大きく感じられるのです。かつての律令時代ならば「王宮を見下ろすとは何事ぞ!」ということになったでしょうが、現代では世俗化した宗教勢力ほど力が強くなっているのは日本と同じかもしれません。

八達門から南水門跡へ向かって歩いて行き視界が開けると、途端にこの建物が目に入ってくる感覚を経験したとき、織田信長が天守建築を城郭に導入した気持ちが少しわかったような気がしました。西将台や八達門、各砲楼など、伝統的な建築物を一通り見てきた目には、このキリスト教の教会は異様に映ります。そういえば韓国ではキリスト教のことを「天主教」と言うんですね。



"Shiro Fumi" No.41 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.